



レジナレス・ワールド 5

η L P η η L I G η T

式村比呂

Shikimura Hiro



アルファライト文庫



デイロン

ユガリス教聖騎士団副団長にして、ホルバール王国の第二王子。
おぼつ 横暴で自己中心的な性格。

ジルベル

強大な力を誇る銀魔狼。
『風の精霊王』の力を宿す。
人化はお手の物。

ザフィア

エルフ族を率いる若きハイエルフ。
シュウに命を助けられ、世界樹を護っている。

アリシア

獣人族の族長の娘。
武器の扱いに長け、薬草の知識も豊富。
『世界樹の眷属』の加護を得る。

アンネリ

かつては人間の娘だったが、『不死鳥』に生まれ変わった。

ユキ

白竜の娘でシュネの妹。
アンネリと共に暮らす。

シュネ

穏やかで知性に優れる白竜の娘。真の姿は白く巨大な竜。

シュウ

本編の主人公。
“黒竜殺し”の二つ名を持つ最強剣士。
『世界樹の守護者』となる。

サラ

シュウの幼なじみで共にVR-MMO世界に転生する。
『水の精霊王』の力を操る“舞姫”。

主な
登場人物

レジナレス大陸



1

ラドムの街に冬が来た。

急ピッチで開発された城郭都市ラドムの最奥には、美しい白亜の宮殿である、シュウたちの居城がそびえ立つ。

その周囲には、城内の住居を守るため、高さ五メートル以上はある石組の城壁が、城門からぐるりと半円状に構築されていた。

城壁の南東側に広がるのが、木造の真新しい城下町だ。

そんなラドムに、三日前からしんと雪が降り続けている。

都市が建設される前からここで暮らす住民が、「ラドムの冬は厳しい」と言っていた意味を、シュウたちはいきなり実感させられる形になった。

降り始めからの積雪は、すでに一メートルを超えた。

石造りの堅牢な城郭内部はともかく、城下町は木造なので、ギルドに所属する冒険者た

ちは、こぞって雪かきや雪下ろしに駆り出される。

ただ、ラドムからネクアーエルトの関所までや、ラドムとノイスバイン領レリウ村を結ぶ各街道は、通行に全く支障がない。

贅沢にも、精霊王の力を駆使して作られた結界具で、除雪がなされているからだ。

一方、商都エベルバツヒとの交易路は一切除雪されることもなく、すでに二メートル以上の積雪で埋まり、人の往来はほぼ不可能だった。

シユウとサラは、銀魔狼ジルベルや白竜の娘シユネと一緒に、シユネの妹であるユキや、その友達アンネリが暮らす竜の巣に起き、束の間の休暇を楽しんでいる。

ラドム建設も一段落し、シユウは片腕の支配人ラルスに、サラはベテラン冒険者のサルデンに自分の仕事を任せて、やっと以前のように、気ままに使える時間が取れるようになった。

アンネリとユキが竜の巣、つまり世界樹の化身ユーガの元に、ずっと籠もっているのは理由がある。

世界樹は魔泉に根を下ろす。そして魔泉から噴き出す瘴気を吸収浄化し、魔素のみを大気に放出する。

魔力的存在である白竜や不死鳥は、その魔素を身体に取り込むことで育つという。

よって、転生を果たし不死鳥の雛になったアンネリは、ユーガのそばにすることで、成長に好影響が期待できた。

ある日ユキが目覚めると、アンネリの姿がなかった。

ユキから離れないアンネリは、いつもその枕元にちよこんと丸まって眠る。毎日一緒に起きて、ご飯を食べて、共に空を飛ぶのが日課なのだ。

「……アンネリ？」

ユキは心配になって飛び起き、竜の巣の洞窟から飛び出した。

「あつ……」

洞窟を一步出たところで、ユキはシユウとサラを見つけた。

客人が来た時のために建てられた四阿でくつろぐシユウと、その膝の上でこやかにクッキーを食べるユーガ。

そして、シユウの頭の上で丸くなって居眠りするのは、まさに今探していたアンネリだった。

「むー」

ユキの頬は膨らんだ。

アンネリが自分を起こさず行ってしまったことが腹立たしいのか、自分よりシユウに懐いていることが腹立たしいのか、ユキにはわからない。

そんなユキに気付いたサラが、ニコニコと手を振って呼んだ。

「ユキ、カタジーナのクッキーがあるわよー」

「！」

不機嫌だったユキは、現金にもぱつと表情を輝かせて駆け出した。

メイド長カタジーナの特製クッキー——卵とハチミツ、アーモンドパウダーを焦がし、バターで上品に加工して、小麦の生地に挟み込んだもの——は、ユキの好物だった。

「アンネリ、今日も飛ぶの？」

ユキは、サラの淹れてくれた甘いミルクティーとクッキーを頬張りながら、相変わらずシユウの頭の上にいるアンネリに聞いた。

「ぴ」

アンネリはぱちつと目を開け、一声鳴くと、ユキの肩の上までよたよたと飛んでくる。クッキーやサラお手製のサンドイッチでお腹いっぱいになったユキは、アンネリを連れ、飛行の練習に出かけていった。

三日間雪を降らせ続けた雲が晴れた頃、クリステルとザフィアのハイエルフ姉弟が、^{あずまや}四阿にやって来た。

遅れて、獣人族の娘アリシアも、迎えに行った翼竜に乗って竜の巣に到着した。

「みんな、久しぶりね」

サラが一同を眺めて、嬉しそうに言った。

「ここんこ、全員忙しかったもんね」

シユウもうなずく。

「それで、ザフィアは新しい里の運営が一息付けそうなの？」

サラが問う。

「ああ。もう俺がいなくても、里も翼竜隊も問題ない」

ザフィアは、主にエルフの若手を率いて、ネクアーエルツ大森林から竜の巣の麓に移住し、新しいエルフの里と翼竜隊の整備に当たった。

だが、その間シユウたちの冒険に同行できなかったことと、人間のアンネリを助けられなかった話を聞いたことで、激しい後悔の念に襲われた。

そこですぐに配下のエルフから数人のリーダー候補を選び、たとえ自分が指導者の地位

に留まらなくても、里を維持したり翼竜隊として統制の取れた活動ができるよう、改めて鍛え直していたのだった。

クリステルは、里の長で『世界樹の守護者』であるグイードと、祖母であるカトヤから、ネクアーエルツの指揮を一通り習った。そして、シユウたちがひとまずラドムに落ち着いたこの冬は、一行に合流して過ごしている。

アリシアも、兄で獣人族の長、ゼクの手助けをすべく、里とラドムを忙しく往復していたが、この積雪でお役ご免となってシユウの元に帰ってきた。

「こうしてみると、全員揃うのって本当に久しぶりよね」

サラが全員の顔を眺めて、嬉しそうになつこりと微笑んだ。



サラは、ザファイア配下の翼竜隊に頼んで、ラドムから食材を運び込ませた。

翼竜に乗ったエルフの若者から大量の荷物を受け取ると、女性陣を引き連れて、四阿に隣接する厨房棟の方に、賑やかに移動する。

残されたシユウは、冷めかけのミルクティーを一口飲んで、ザファイアをふと見つめた。

「なあ、シユウ」

目が合ったことをきっかけに、さつきから何か言いたげだったザファイアが口を開く。

「あの不死鳥になった少女——アンネリの話。済まなかった」

いきなりザファイアは頭を下げた。

「俺も姉さんも、自分のことで精一杯で、お前らと一緒に旅をしていなかったからな。その間に起こった不幸には、思うところがある」

「……しょうがないさ」

シユウは目を伏せて、淋しそうにふつと笑う。

「ああ。お前ができないことはきつと、他の誰にもできなかった。しょうがないのだろう」

ザファイアも同意する。かつてザファイア自身が生命の危機を迎えた時に、シユウの力——

『世界樹の守護者』としての能力は、はつきりと思い知らされた。

「だが、俺や姉さんが一緒にいれば、お前にできることの幅は広がったかもしれない。俺はそれを悔やんでいる。だから——」

ザファイアは、秀麗なその顔を強く引き締めてシユウを見た。

「これからは、俺たちも連れて行ってくれ」

「うん、わかった」

決意の籠もったザフィアの言葉を、シユウは大げさだとは思わなかった。

大きな責任を与えられながら、それをしっかりこなした上で、自分たちの心配までしてくれるこのハイエルフの青年に、シユウはありつたけの感謝を込めて微笑む。

「ありがとう、ザフィア」

「べ、別に礼を言われることはない」

これだ。かなわない、とザフィアは思う。

シユウは、かつてザフィアの命を救ったことなど、この瞬間には全く気にしていないのだろう。それが、この世に生きる全てのエルフ族にとって、どれほど大きな意味を持つのかも知らず。

ザフィアが見るところ、シユウはグイードがエルフの「王」だと思っているようだ。

対外的にはその認識で正しい。なぜなら、グイードは種族のリーダーだからだ。

部外者から聞かれれば、グイードが王と答えるだろう。

だが、エルフたちにとっては、グイードの存在は「神」もしくは「神の守護者」であり、施政者は別にいる。それが、ザフィアである。

シユウは、その命を救った大恩人なのだ。

シユウの能力は、未だ人間としてのそれである。

確かに、『世界樹の守護者』として強大な魔素を生み出す力を持ち、冒険者としての能力も、この世界の人間族でいえば屈指のものだろう。

だが、後天的な修業や実戦で培った経験による強度はさておき、身体能力はサラに比べると大きく劣る。

ウンディーネの加護により超人的な能力を授かったサラに対し、シユウは、未だ世界樹の守護者としての超人性が発現していないのだ。

ただシユウは、ある意味で神格に近いほどの事象改変を行う。

例えば、ザフィアやアンネリの魂を基に、失われた肉体を復元したり、魔剣を聖剣に組み替えたり。

ザフィアがグイードに尋ねたところ、それは『世界樹の守護者』の能力ではなく、おそらく精霊鍛冶師としての経験が発展した、この世界でシユウのみが使える『奇跡』ではないか、という答えが返ってきた。

もちろん、精霊鍛冶をどんなに深くマスターしたところで、シユウと同じことができる人間などこの世にいないだろう。

なぜシユウにできるのか？ それは、シユウが、世界樹に匹敵するほどの魔素を自らの

身体で操れるからだ。

グイードに言わせると、彼自身も同様の能力を持つという。

世界樹の若い種子^{しゅし}を身に宿した時、守護者の肉体の特性は、世界樹と同化してしまう。結果として、世界樹の圧倒的な魔力、瘴気を浄化し、魔素に変える能力、そして、悠久^{ゆうきゅう}の生命を得る。

だが、グイードに可能なことの多くは、未だシユウにはできない。

反対に、シユウの精霊鍛冶や事象改変といった能力は、今からどれほど修練を積み重ねても、グイードにはできる気がしないのだと言う。

それが、グイードとシユウの種族的差異——ハイエルフと人間の違いによるものなのかどうかは、グイードにもわからないそうだ。

グイードは、『世界樹の守護者』になった瞬間に、世界の理^{ことわり}から外れた存在になったと言える。

シユウも同様の立場のはずなのだが、ザフィアからすれば、目の前の彼は、ふらっとエルフの里を訪ねてきたあの日から、全く何一つ変わっていないかった。

人間族でありながら、獣人族にも、エルフにも、白竜にも銀魔狼にも、接し方を変えない。

それどころか、精霊王に対しても、はいはいとまるで友人のように語らい、ものを頼んでいる。

当初、人間とはそうしたのかという先入観を持っていたザフィアは、ノイスバイン王や他の国王たちが見せる精霊王への畏怖^{いふ}の表情を目の当たりにした時、やっと気付いたのだ。

シユウは人間としても、やはり少しずれているのだと。

そういえばサラにも、シユウと同様の傾向^{けいこう}がある。

だから、ザフィアが抱くシユウへの違和感の大部分は、彼らが異世界から来た、ということに由来^{ゆらい}するのかもしれない。

サラは平気でジルベルに抱きつくし、アリシアに対して可愛い可愛いと、同性なのにやたらとスキンシップをしている。

孤高^{ここう}の銀魔狼であったジルベルにしろ、獣人族の戦士であるアリシアにしろ、すでに根柢^{こん}な奴らだ。

結局、ザフィアはそう思って苦笑するしかない。

「ご飯出来たよ」

サラが、シユウとザフィアを迎えに来了。今日は、シユウの好物である鳥の揚げ物のようだ。

「おつ、やった！ 竜田揚げだ」

シユウが相好を崩す。

サラの料理の中でも、鳥の揚げ物はエルフに受けがいい。

日本風からあげとフライドチキン、あつという間にエルフの新定番料理になった。

一同がテーブルに座って食事を始める。

「ん、これはいけるねサラ。中濃ソース？」

「それに、ケチャップとニンニク」

サラとシユウの会話を聞きつつ、ザフィアとクリステルも、見よう見まねでパンに揚げ物を挟んで一口かじる。

「う、美味い……」

「本当！ ニンニクは苦手ですが、これなら私も大丈夫です！」

エルフは人間と違い、スパイスやハーブを好まない。特に人間の作るニンニク料理は香りが強すぎて、味を殺すとエルフには不評だ。

「えへへ。さすがにもう、エルフとは長い付き合いだもん」

サラが得意げにそれに答えた。

「ああ、そういえばサラには、料理指導で大変世話になってたな」

ザフィアは、からあげで熱狂したエルフたちにレシビを教えるサラの姿を思い出す。

「フライドチキンにもニンニクは入れるからね。何度も実験して上達したよ」

幸い、たくさん作っても残さず食べてくれる相棒が、二人もいるのだ。

そのシユネとジルベルは、喧嘩にならないようそれぞれの眼前に山積みしてもらった竜田揚げを、はふはふと頬張り、みるみるうちに平らげていく。

隣に目を向ければ、ユキとアンネリも、仲良く竜田揚げを食べている。

「あれって……共食いじゃないの？」

アリシアが、竜田揚げをついばむアンネリを見て顔を蒼くする。

「どうだろ？ あ、でも鷹だつて小鳥を狩るでしょ？」

シユウの一言で、アリシアは「……あ、そっか」と、けろつと表情を戻し、竜田揚げサンドにかぶりつく。

アンネリもユキも、シユネやジルベルほどではないが、よく食べる。

こうして、久しぶりに全員が揃った昼食のごちそうは、あつという間に姿を消していった。



竜の巣の麓にあるエルフの里では、シユウがエルフ鍛冶に、サラはお料理教室にと、二人共引^ひつ張り蛸^{たこ}だ。

ドワーフ鍛冶が精錬^{せいれん}と打ち物を得意とするのと対照的に、エルフ鍛冶は、エンチャントに優れる。

シユウは精錬や鍛造^{たんぞう}の分野に全く才能がなかったので、他の人が打った武器にエンチャントしたり、刀身を研ぎ^と上げて強化したりする方面に特化していた。

つまり、新しいエルフの里の若手たちにとっては、これ以上ない師匠になる。

だが最初は、若い鍛冶師たちは半信半疑^{はんしんはんぎ}だった。

シユウが鍛冶場に姿を見せた時、職人たちは、『世界樹の守護者』としての敬意は見せるものの、それ以上の関心など寄せなかった。

そんな周囲を気にもせず、シユウは淡々と、前回の一戦で破損^{はそん}したジルベルの武器であるかぎ爪——ブラッディクロウを修理していく。

幸い、破損したのは爪の形状をした刀の刀身のみで、普段それを隠しておくための機構



は無傷だった。そこでシユウはアイテムガジェット^{ガジェット}の在庫から使えそうな脇差し^{わきざし}を三本選び、軽く研ぎ上げてから組み付ける。

「シルフ」

「……はい」

シユウはまるで、自分のすぐ後ろに相手がいるかのように、気軽に風の精霊王に話しかけ、シルフもそれに応えて具現化した。

この時点で、エルフの鍛冶師たちは恐慌状態^{きょうこう}となった。

「……どう？」

「充分です。それでは……」

シユウの問いは、新しい武器の出来を尋ねたものだ。今回も、シルフのお眼鏡にかなったらしい。

シルフの祝福でエンチャントされた『ブラッディクロウ・改』は、白銀色の刀身から柔らかに、緑色の精霊の波動^{はどう}を放ち始めた。

「うん、ありがとうシルフ」

シユウは、前回と同じくしつかりした出来映え^{できばえ}に満足して礼を言う。シルフも満足そうにうなずいて姿を消した。

次は、アリシアの革鎧^{くわよろい}だ。

通常の革鎧に黒竜の鱗^{うろこ}を合成し、仕上げに土の精霊王ノームのエンチャントを施す^{ほどこす}。

この頃になると、鍛冶師たちはシユウの周りを取り囲み、じっとその作業に見入っている。そして、そのシユウの技量と精霊王の力の凄まじさに心を奪われていた。

作業が終わってシユウが片付け出すと、「あ、あの……」と、若いエルフがおずおずとシユウに話しかける。

「シユウ様。も、もしよろしければ、私に手ほどきを……」

その言葉が呼び水となって、若い職人を中心に、多くの者が我先にと、シユウに教授を依頼した。

とりあえずシユウは、全員一斉に作業してもらおうと、アイテムガジェットから投擲用^{とうてき}ナイフを人数分取り出し、研いでもらった。

八人いたエルフの鍛冶師たちは、それぞれ自分用の砥石^{といし}を持っているので、思い思いに研ぎを始める。

ここでシユウが教えることは少ない。刃物の研ぎは、理屈さえわかれば、あとは自身で回数をこなして上達する以外にないからだ。

見たところ、ここにいるエルフたちは全員、最低限の研ぎの技能は習得していた。

「じゃあ、精霊の祝福を与えましょう」

シユウは、研ぎ場から作業卓に場所を移すよう促す。

八人を作業卓に一列に座らせると、「皆さんは目をつぶってください」と指示した。

そして一人ずつ、背後から両肩に手を添え、彼ら一人一人の契約する精霊に直接指導していく。

「ほら、わかる？ このナイフの『核』。そこにエンチャントを集中させると、必ず上手く行くよ」

シユウが精霊に教えている内容が、目をつぶっているエルフにもはっきりと伝わる。

シユウの言う「核」とは、武器や防具の「存在の中心」とでも言うべき場所だった。

エンチャントを行う時、ここが魔力の中心になる。

それは生物でも無機物でも変わらなかった。

八人全員に最初の手ほどきを終わると、もう一本ずつ投擲ナイフを渡し、練習してもらった。二度目はどれも見違えるほどの仕上がりを見せ、シユウは全員から深く感謝され照れていた。

シユウが鍛冶場で指導している頃、サラもエルフの女性たちに揉まれながら、地球発のレシピ伝授に追われていた。

エルフは基本的に獣肉を好まない。食べられない訳ではないが、肉の香りが合わないようだ。だが、サラの作る鶏料理なら、どれも彼らに受け入れられる。

揚げ物だけでなく、チキンソテーや焼き鳥も好評だし、ササミサラダなどもエルフ族の舌とハートをがっちりキャッチした。

また様々なデザートは、長寿でいろんな経験を積んでいるはずのエルフからしても新鮮だった。

連日サラの元には、教えを請うエルフ女性引きを切らない。

そこでサラは、女性たちを三人ずつのグループに分け、それぞれに一品ずつレシピを教えて回った。

「あとは皆さんでそれぞれ教え合って、広めていってください」

効率的な授業を考えてみたものの、それでも十組は同時に集まってしまう。

サラは休む間もなく各グループを回っては、疑問点の解消や調理のコツの実演をする羽目になった。

ちなみに、今回も大量に作られた試作品を片付けるために席を用意されたジルベルとシユネにとっては、大変に幸福な一時だったという。

朝晩の食事時になると、シユウの頭の上に乗っかる不死鳥のアンネリ。

最初は焼き餅を焼いて彫れつ面だったユキも、クリステルやシユネから「どうもアンネリはシユウ様の魔素を糧としていますようです」と言われて、渋々納得していた。

ところが、わずかその一週間後。

「……シユウ君、重そうね？」

朝食の時シユウの頭に乗ったアンネリが、明らかにはじめの頃の倍近い大きさに太っているのだ。

サラが呆れて言うと、シユウは苦笑し、「重いよ……」と頭の上のアンネリを見上げた。アンネリはそんなシユウをくちばしでつつく。

まるで「レディに重いとは失礼な」と抗議しているようだった。

「……よほどシユウの魔素と相性がよいのであろう」

普段、無関心なジルベルの言葉に、シユネも同意する。

「彼女はシユウ様の魔素で肉体を取り戻したのです。相性がよいのも当然な気がしますね」

「それにしてもびっくりな成長よね」

サラがしみじみと言った。

最初に見た時は、人間のこぶし大くらいの大きさだった。

竜の巣で再会した時も、若干大きくなり、身体もしっかりし始めたかなという印象だったが、ここ数日で、明らかに成長速度が変わった。

今でもひよこのように、柔らかそうな羽毛にくるまれているが、そろそろシユウの頭から落ちそうなサイズになっている。

「シユウ君、なんかやった？」

サラの問いに、シユウも首をひねった。

「うーん。意識してアンネリに魔素を集めてはいるけど、それ以外は特に何もやってないけどなあ」

「……シユウ君が意識して魔素を集めたら、私たちが魔力切れしてても満タンになるけど……」

「確かに、そうですね」

サラの苦笑にクリステルがうなずく。

精霊王の加護を得たサラたちの魔力は、この世界で並ぶ者がいないほど大きい。それこそ、白竜であるシユネに匹敵するだろう。

「シユウ様、アンネリさんはどのくらいの魔素を吸収してるのでしょうか？」

クリステルが尋ねる。

「感覚的には、出した分だけ吸収してる気がするよ」

「えっ、それはその、ずっとですか？」

無邪気^{むじゃき}にうなずいて見せるシュウに、クリステルは不安を覚える。

さつきサラとクリステルが言った通り、瘴気のある場所でシュウが浄化して放出する魔素^{まそ}の量は膨大^{ぼうだい}だ。

その量をずっと吸収し続けている、この丸々と太った赤いボールのような雛は、一体どれほどの魔力をその身に蓄え^{たくわ}えられるのだろうか？

クリステルは思う。

もしアンネリが、あまりに膨大な魔素に毒され魔獣化してしまつたら――。

シュウはこの子を倒せるだろうか？

無傷でいられるだろうか？

『サラマンダー』

誰にも聞こえないほどの小声で、クリステルは自らの裡^{うち}に宿る精霊王に呼びかける。

『あの子――アンネリは何者ですか？』

サラマンダーはクリステルの意思をくみ取り、周囲に漏れ^もないように、思念^{しねん}で回答する。

『不死鳥は一種の魔物ですが、『格』は私たち精霊王と同等。白竜様と比肩^{ひけん}しうる存在です』

『そ、それで、善悪は？』

『計^{はか}りかねます。ですが――彼女からはシュウ様への深い信頼と尊敬の念を感じます。彼女がシュウ様に仇成^{あだな}すとは考えにくいかと思えますよ』

『そう、ありがとうサラマンダー』

クリステルはアンネリを脅威^{きょうい}とは見なさず、ひとまず見守ろうと思い直した。

「さて、今日は僕も君たちの訓練に付き合うよ」

朝食後、シュウはユキとアンネリに声をかけた。

「私も行こうかな？」

後片付けをしていたサラも、手を止めて応じる。

「うん。それとシュネとクリスも、付き合ってくれる？」

シュウの言葉に、シュネとクリステルは不得要領^{ふじようりやう}ながらうなずいた。

竜の巣を構成する山脈には、良い上昇気流が発生するポイントがあり、若い翼竜などはここで飛行訓練を行っている。

誰かを初めて背中に乗せて飛ぶ時は、翼竜も乗り手も緊張するものだ。慣れるまでは落下、転落の可能性が常につきまとう。

訓練を重ね、エルフと翼竜、双方の信頼が生まれて、やっと『翼竜隊』の一員になれるのだ。シユウたちは、その訓練場である断崖^{だんが}にやってきた。

シユウはアンネリを抱えてユキの背に。クリステルとサラはシユネの背に乗っての移動だ。

「じゃあ始めようか。今日は、ユキの訓練もやってもらいたいけど……」

シユウがシユネに目をやる。シユネはうなずくが、ユキは不満そうだった。

ユキとしては、いつものようにアンネリと空を飛び回ったかったのだろう。

「シユネには僕が乗って、ユキにはサラとクリスが。アンネリはユキの後ろを付いてきて」言われた通りの組み合わせに分かれ、次々と断崖から飛び立った。

一行は翼竜隊の訓練コースを飛行する。まずは急降下し、エルフの里に沿って外周を巡り、世界樹の上を越え、断崖に帰る。

速度の指示はシユウが出している。ユキもアンネリも、いつも飛行訓練で翼竜隊に同行しているので、よく知ったコースだった。

だが、一人前のシユネと、彼女の背でもっとも長い時間飛んでいるシユウのコンビは、

一心^{いっしんどうたい}同体^{どうたい}というか、とにかく速い。

自分の背に二人も乗せたことがないユキは、バランスも上手く取れないし、後ろで必死に追いつけるアンネリが気になって、集中できない。

断崖を下降し、エルフの里を旋回^{せんかい}する頃には、すでに前に行くシユネの姿を見失っていた。

先に断崖まで戻ったシユウは、困ったようにシユネに語りかける。

「シユネ、ユキはあれが限界なの？」

「……わかりません。確かに身体は私より未成熟ですが、お二人を乗せた程度で、これほど遅れるとは思えません」

シユネは、他ならぬ妹の評価のため少し悩んだが、正直に答えた。

「そう」

シユウはうなずいて、それきり黙り込む。

「あの……シユウ様。よろしければお考えをお聞かせいただけますでしょうか？」

シユネは、シユウの表情にこれまでにないような厳しさを感じて、おそるおそる尋ねた。

「うん。ああ、別にすぐにどうってという話じゃないよ？ むしろ逆に、今の状態で、ユキを無理に僕たちに付き合わせるのはどうなんだろう、って思ったんだ」

窺うようなシユネの仕草を見て、妹の心配をしていることに気付いたシユウは、軽く笑みを浮かべた。

「レオナレルで襲われた時、僕たちがもつと早く危険だと気付いてあげられてたら問題はなかったんだ。でも、ユキに無理強いをして強くなるよう迫るのは、間違ってるよね？」

シユウは、やつと遠くに姿が見え始めたユキに目を向けて言った。

「もう少し成長するまで、ユキやアンネリはここに残した方がいいのかなって、そう思ってた」
「……」

シユネの胸中は複雑だった。

言い方はともかく、要するに、ユキがシユウの役には立たないと判断されたということだ。彼女たちの安全のために残す、というシユウの言葉は、優しさから出た表現だろう。

「シユウ様。まだ雪解けまで時間もあります。私がユキを鍛えますので、もう少しお時間をいただけますでしょうか？」

シユネの言葉に、シユウは一言、「うん」と答えた。



翌日から、シユネによるユキの特訓が始まった。

サラは暇を見つけて付き合ったりしているが、シユウはあえて、もっぱら鍛冶屋で精霊鍛冶に精を出していた。

仲間のものだけでなく、エルフの戦士たちの防具を数多くエンチャントし、感謝される日々を送る。

そして、数日後。

シユウは久しぶりにユキたちの特訓に顔を出してみた。

シユネとユキは、それぞれ三人ずつエルフを背中に乗せて、いつものコースを飛んでいるようだった。

ああ、確かに成長しているな——シユウは乗り手を守る防護魔術を発動させつつシユネの後を追うユキを見て、少し驚いた。

「やあアンネリ」

「び」

スタート地点の断崖に残っていたアンネリに、シユウは声をかける。

アンネリは傍らにすり寄ってきて、座るシユウの足に頬をすり寄せた。

せつかく二人つきりになったので、シユウはいくつかの疑問をぶつけてみることにした。
「ねえ、アンネリ」

「び？」

「君は本来、普通の鳥とは違う。不死鳥だし、どちらかというとき精霊や聖獣に近い。わかる？」
ちょこん、と首をかしげて、真つ赤な雛はシユウを見上げた。

「ねえアンネリ。今のままじゃ、せつかく翼があるのにユキと一緒に飛べないでしょ？」

シユウが言うと、アンネリは「びう」と、しょんぼりしてしまう。

「できるかどうかかわからないけど、雛じゃなくて、ちゃんとした成鳥の姿になれるか試してみようか？」

「び！」

不思議なことに、シユウにはアンネリの意思がダイレクトに届く。

理由はわからないが、不死鳥のアンネリを構成する魔力のほとんどが、シユウと、シユウにもっとも近い魔力を発するユーガのものであることも、理由の一つかもしれない。

それになんと言っても、失われつつあったアンネリの魂をこの世につなぎ止めたのは、シユウの力によるところが大きいのだ。

シユウは、アンネリの頭に手を添えて、目を閉じる。

アンネリの存在——魂の核とでも言うべきそこに、自分の意識を接続する。

以前、魔剣ソウルイーターに取り込まれてしまった時に開眼し、ザフィアやアンネリの生命を救ったことで完全に身についた、この世界でシユウだけが持つ力。

アンネリの魂に同期したシユウは、自分自身が『不死鳥』としてイメージする気高い鳥のイメージを、直接伝えた。

アンネリはこくと頷く。

見た目はひよこであるが、彼女は、人間としての生を持ち、一生懸命に生きた少女でもあった。

記憶や意識がどこまで維持できているかはわからない。

しかし、あの日から数ヶ月。アンネリの魂の傷も、少しは癒えているとシユウは確信した。

『いい？ アンネリ。君ならなれるよ』

はつきりとイメージする。

大型で、紅蓮の双翼を有し、勇敢で、優美で、霊鳥の頂点に君臨する——生命の象徴。シユウの全身から緑色の魔力が噴き出し、まるで渦を巻くかのようにアンネリの身体に吸い込まれていく。

シユウは、接続していたアンネリとのリンクを切る。

「さあ、頑張って！ アンネリ」

アンネリの頭から手のひらを放し、目を見開いて大きな声で励ました。

「キューー！」

今までの鳴き声と明らかに違う鋭い叫び声^{さるど}を上げたかと思うと、シユウから与えられた緑の魔力が、真っ赤な炎のそれと化した。

その瞬間。

アンネリの身体はまるで爆発したかのように一気に膨らみ、再び収斂^{しぎれん}する。

燃えたぎるような炎の魔力が身体に全て吸収されると、そこには、両翼を広げると五メートルにもなりそうな聖獣、フェニックスが佇み^{たな}、シユウを見下ろしていた。

「キュ」

アンネリはシユウを誘った。

「うん、わかった」

シユウは微笑みながらアンネリの首をなで、ひらり、と彼女の背に飛び乗る。

「じゃあアンネリ、ユキに迫いついてみせてよ！」

アンネリはふわ、と両翼を広げて、姿勢を前傾^{ぜんけい}に変えて、一気に断崖から飛び降りた。

そして、落下する勢いそのままに、本気の白竜にも負けぬ速度で空気を切り裂いて飛ん

でいく。

絶妙に羽根で風を受け、初めてなのに、まるで老獯^{らうひん}な猛禽^{もうきん}のように、華麗^{かたけい}に空を滑^{すべ}っていく。

アンネリはそこでようやく、羽ばたいた。力強い上昇飛翔^{ひしょう}は、間違はなく羽根の力だけではなく、豊富な魔力によるのだろう。

シユウを背中に乗せていながら、あつという間に先行していた二体の白竜に追いついた。

「キューー！」

歓喜に満ちたアンネリの鳴き声を、シユネとユキの姉妹は呆然^{ぼうぜん}として聞いた。

全力で飛翔している白竜たちをあつという間に後方に置き去りにして、アンネリは飛ぶ。目標はゴール地点、あの断崖の上だ。

「アンネリ！ すごい！ すごい！」

帰ってきたユキは、背中のエルフたちを降ろすと、輝くような満面の笑みでアンネリの元に駆けつけてきた。

「シユウ様！ これは一体？」

シユネも遅れてやってくる。

「僕は、不死鳥の姿を教えたただだよ。これは、アンネリが頑張った成果なんだ」

シユウは、ユキとシユネに先ほどの成長を話して聞かせた。

「ねえアンネリ、普段は身体を小さくできる？」

「キュー！」

アンネリは一声鳴くと、優美な巨体をそのまま縮小するように縮めていく。

そして、五十センチほどのサイズになると、とんとユキの肩に乗って、頬ずりした。

「すごい！ 良かったねアンネリ！」

ユキはまるで、自分のことのように感激してはしゃいでいる。

「ユキ、あなたも頑張らないと、アンネリに負けてしまいますよ？」

シユネが微笑みながら妹に釘を刺した。

「う……負けないもん！」

ユキは一瞬しゅんと視線を落としたあと、力強く姉を見上げた。

シユウはその後、シユネとユキ、アンネリとサラを連れてラドムに戻った。

アンネリの実姉アデラをはじめ、アンネリを失ってショックを受けていた全員に、こうして成長した姿を見せてあげたかったのだ。

アンネリの優美な成鳥の姿に、皆が感激していた。

特に、この世でたった一人の肉親であるアデラは、大きな涙をぼろぼろと流しながらアンネリを抱きしめ、シユウにいつまでも感謝の言葉を贈り続けていた。

シユウは、その言葉をくすぐったそうに、伏せた顔に微笑を浮かべて聞いていた。

——シユウ君はいつでもそう。

サラは幼い頃から、他人に褒められるとそうやって照れるシユウの姿を見てきた。

いつまで経っても、褒められることに慣れない。

だが、別にそのことを話したり、改善するように促したりする気など、サラには無かった。

私が知っていればいい……そして、私が知っていることをシユウ君も知っている。

それで充分。

シユウがこの表情になる時、それを見つめるサラの瞳は、いつも優しく、穏やかだった。

全員が落ち着いたあとの夕食はとても和やかだった。

アデラの傍らから離れようとしないうちに、全員から温かい視線が送られていた。

見た目が不死鳥になったとはいえ、アデラの愛情も全く変わらない。

記憶がどこまで回復しているのかは誰にもわからないが、少なくともアデラに対する姿

勢は、明らかに妹のものだと確信できた。

食後、シユウは久しぶりに城の屋上から、ラドムの全景を見下ろしていた。

雪深いラドムだが、住民総出で雪かきをして街を守っている。

とつぱり陽の暮れた闇の中、シユウは物思いに耽る。

「ここにいたの？ シユウ君」

やって来たサラが、そつとシユウの両肩に手を置いた。

「ねえサラ、見てよ。城壁の向こうまでずつと家の明かりがついててさ」

シユウが穏やかな声で語りかける。

「あの明かりの一つ一つにさ、お父さんやお母さんがいて、子供たちがご飯を食べたり、泣いたり笑ったりしてるんだな、って思うとさ……」

「うん？」

「なんか、いいよね」

「……うん」

シユウもサラも、そうした団欒を奪われた。だからこそこの新しい世界で、今日まで懸命に家族を——ファミリーと呼べる仲間たちを作ってきた。

その集大成が、このラドムという新都市だ。

二人はのんびりと、この美しい街の夜景を見続けていた。

翌日。

再び竜の巣に赴いたシユウは、アンネリの魔法属性について、火の精霊王であるサラマンダーに相談してみた。

サラマンダーが言うには、霊鳥である不死鳥は、白竜であるシユネやユキと同じく、精霊王と並び立つほどの存在であるらしい。

だから、サラマンダーの眷属ではないそうだが、それでも、火の精霊魔法との相性は非常に良好だという。

また、聖なる光の属性、つまりシユネが持つ能力とも相性が良いそうだ。

シユウは、サラマンダーとシユネに、アンネリの特訓を依頼した。

健気にも、アンネリもシユネとサラマンダーに師礼を表している。

「そうですね……シユウ様、そろそろユキにも魔法の手ほどきが必要な時期かと思います。一緒に競って学ばせてもよろしいでしょうか？」

サラマンダーに異論はないようだ。